



写真2 連日予想をはるかに上回る熱心な参加者が詰めかけたために、会場のうしろの方で立って真剣に発表を聞く参加者。

観測提案（3D分光器，中間赤外線分光撮像装置（MIRFI）等），さらに，すばる望遠鏡用の観測装置としての“主焦点広視野近赤外線モザイクカメラ”の提案があった。最後のセッションである午後には，太陽系天文学，星形成研究，惑星系の形成，銀河団中の銀河の進化，クエーサー・サーベ

イ，宇宙論と大規模構造の各視点から，すばる望遠鏡と計画されている観測装置を使つての野心的な観測計画の提案が披露された。

今回は，その第1回目ということで国立天文台・観測装置製作者側からの予定の説明にほとんどの時間が費やされたが，それらの情報を基にしたより現実的かつ意欲的なファーストライト時の観測研究計画についての討議を次回は期待したい。今回のシンポジウムは，準備不足にも拘らず予想をはるかに上回る熱心な参加者にめぐまれ，なかでもその大半は若い（大学院生

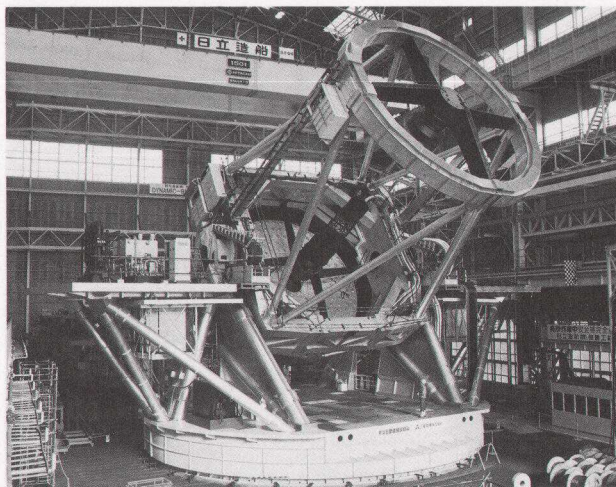
を主とした）研究者であり，彼らのすばる望遠鏡への関心と期待の高さを再認識した。この場を借りて世話人一同から参加者の皆様に改めてお礼を申します。

関口和寛（国立天文台すばる望遠鏡プロジェクト室）

すばる望遠鏡仮組一般見学会報告

2月9日（金）大阪上空は薄い雲が立ちこめ，その間から冬のやわらかな日差しが日立造船桜島工場を照らしていた。すばる望遠鏡は現在国内での仮組試験そして数々の動作試験をほぼ完了し，また解体されて近々ハワイへ輸送される。その出発前に今日は一般の方々へのお披露目ということになった。ドームに入ってしまうとナスミス翼などはドームの陰になってしまうため，望遠鏡全体を眺めることができるのもこれが最後の機会となる。

約530名の応募があり，抽選で下は3



歳から上は 84 歳までの約 400 名を御招待し、約 40 名ずつの班に分かれて見学していただいた。

工場入り口で送迎バスを降りて、こちらを向いた直径 10 m の輝くトップリングを見つけると、見学者の中から歓声ともつかないどよめきの声があがる。見学コースではまず工場 1 階、すばるのあしもとから望遠鏡全体を仰ぎながら、方位軸の油圧パッド、主鏡セル裏の能動支持のアクチュエータ、主鏡運搬台車などを見たあと、2 階へ登りナスミス台の真横を通り、もう一度その雄姿を振り返る。写真撮影は工場 2 階からのみに限定したため、1 階から 2 階への階段を上るあたりから、すばるはいっせいにカメラフラッシュの雨を浴びることになる主製作会社である三菱電機の御配慮で、見学者の移動する場所によって常に見やすい角度に望遠鏡の姿勢を変えていただき、方位軸、高度軸ともに滑らかな動きを印象づけることができた最終見学組にはいつもより多く回転させてくれるサービスつきだ。

約 40 分の見学コースも、見学者の熱心な質問に終始した質問内容も潤滑油の仕入先からすばる以後の日本の天文学の未来についてまで実に多岐にわたり、われわれ解説する者を戸惑わせる。いやがうえでもすばるの計画に対する関心の高さ、期待を肌でひしひしと感じる。

一般見学者の関心の高さに加えて、個人的に印象的であったのは、ここまですばるの建設に携わってきた技術者の方々にお話を伺ったことである。特にこの仮組試験が終わりハワイに送り出したその後は見守るだけになる方も中にはいる。そうした方々は、まるで大事に育て上げたわが子が遠く離れたところに 1 人立ちしていくのを見守るがご



とく、これからのすばるの計画の進展、さらにすばるが拓く新しい宇宙像に期待しているのである。

立派に育った青年すばるの望遠鏡は間もなくハワイ山頂のピカピカのドームでピカピカの主鏡を与えられて新生活を始める。凍りつきそうな冬空の下、当初は予想していなかったふしぎな暖かい連帯感につつまれて家路についた。

最後にこの見学会のために周到な準備をしていただき運営にも協力していただいた、三菱電機の桑垣さん、日立造船の森さんをはじめ、両社の多くの方々にお世話になった。この場を借りてお礼を申し上げる。

(文責：柏川)

天文台側実行メンバー：

唐牛、野口、田中(京)、森、増山、和瀬田、小林、倉田、林、柏川(以上国立天文台)、秋山、石垣、上野、尾崎、嶋田、本原、山崎、吉村(以上京都大学)小宮山(東京大学)